

Let's Know Hiroshima Castle.

しろや！ 広島城



No. 18

行ってみよう 毛利氏の居城

みなさんはお城めぐりをしたことがありますか？ お城と言っても、天守閣のある城ばかりではありません。日本の城の多くは戦国時代以前に造られた山城です。織田信長や豊臣秀吉の時代になると、天守閣や石垣・堀を備えた近世城郭、つまり現在われわれが一般的にイメージする城になっていきます。今回は、毛利氏とその一族の城を通して、様々な城を紹介していきます。ぜひみんなで城を見てみよう！！

<その1 広島城より前の城>

毛利氏の城といえば、まず郡山城でしょう。この城は、広島城を築城するまで本拠とした山城で、広島市から北東に45キロほどの安芸高田市吉田町にあります。この城は15世紀の中ごろまでに造られたと考えられています。もともとは現在残っている城跡よりもっと小規模のものだったようですが、戦国時代・毛利元就の代に、山全体を城として整備しています。中国地方のほぼ全域を領有した戦国大名の力のほどを感じることができます。写真①は、毛利元就が全山を城郭にする前の中心であった旧本城くろねと呼ばれるところです。このような平坦面を曲輪まがわといい、曲輪は山じゅうにくまなく階段状に配置されました。現在



写真①

の郡山城には曲輪がたくさん残っており、登山道や説明板もあり、非常に分かりやすく整備されています。

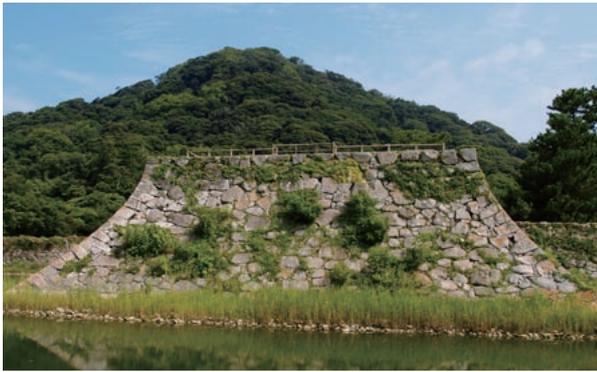
郡山城の周辺には、この他に毛利一門やその家臣の城が沢山残っており、山城の好きな人にはお勧めの場所です。毛利元就が家督を継ぐまで居城としていた猿掛城もその一つです（写真②）。



写真②

<その2 広島城より後の城>

毛利氏は、輝元の代の天正17年（1589）に広島築城を開始しますが、その11年後の関ヶ原合戦の敗戦により改易となり、その後萩を居城とします。萩城は、明治時代の初頭には天守閣が壊され、その後は再建されずに天守台の石垣のみが残っていますが（写真③）、海辺に拓かれた城と三角州に位置する城下町は、完全な平城であった広島城を彷彿とさせます。萩城は、この



写真③

ような広島城との共通点もありますが、その背後に指月山が位置しており、ここが本丸であるため、もしかしたら郡山城と広島城の要素を持った城なのかもしれません。あなたは どう思いますか？

また、広島改易後、毛利氏はすぐに萩城を築城したと思われがちですが、実はその前に別の城を仮の居城としていました。この城が高峯城で、現在の山口市にある山口県庁の奥の山にあたります。

<その3 一族の城>

毛利元就には、長男隆元のほか、次男吉川元春と三男の小早川隆景がいました。吉川氏といえば、元春が住まいとした館跡が山県郡北広島町にあり、石垣が残っています。館跡は近年整備されており見学が可能です（写真④）。また、元春の三男の広家が関ヶ原合戦の後に岩国城（写真⑤）を築城したことも知られています。小早川氏については、山陽本線の車窓から見ることの出来る新高山城（写真⑥）、それに本丸跡に山陽新幹線の駅が建っている三原城（写真⑦）などが知られています。そのほか、関ヶ原合戦の後に輝元の従兄弟（一時養子だった）の秀元が建てた、下関市にある串崎城なども見所のひとつです。

<その4 おまけ 景色を満喫>

縄張を確かめることや、石垣・建物・堀などを巡るのも城めぐりの楽しみですが、小高い山に登ると、もっと楽しいことがあります。それは、景色を楽しむことです。戦国武将が見た景色をあなたも満喫してみましょう。

（玉置）



写真④



写真⑤



写真⑥



写真⑦

すなもちかせい
城下町こぼれ話 「砂持加勢こぼればなし」

前号、前々号に続いて「砂持加勢」の話を…。瓦版が残っている文久2年(1862)の砂持加勢に先立って、実は「砂持」のお祭り騒ぎがあったことがわかりました。時は天保10年(1839)、二葉山の八幡神社(現在の鶴羽根神社)が改築されたのを機会に行われました。氏子たちが「砂持」と称して境内に砂を運ぶということでしたが、実際は派手な衣装で鉦や鼓を鳴らしながら城下を踊り騒いだのです。彼らは、「砂持砂持、砂持せぬ者は、鼻ぐろじゃ、虎屋のおまむかへてやろ」とくりかえし歌ったのです。これは寛政元年(1789)、大坂の玉造稻荷神社の「砂持」と大変よく似ています。こちらも目立つ格好で鉦・太鼓・三味線で大騒ぎ。この時の様子を記した『栄々集』には「砂持せぬ者あほうなり、女房去っても砂持しよ、鍋釜売っても砂持しよ、尻をはつめると鼻ぐろじゃ(以下略)」という囃し歌が残されています。どうやらこの大坂での大騒ぎが広島にも伝わって行われたようです。囃し歌も少し似ていますね。この大騒ぎも町奉行の目に止まり、いくら城下の振興対策のためとはいえ質素儉約のご時世に相反することから、とうとう禁止されてしまったのです。

さて、続いての話は文久2年(1862)の「砂持加勢」の様子を図とともに伝えている4枚

組の瓦版「広島本川川ざらへ町中砂持加勢図」ですが、1枚目が2種類あったのです。この秋の企画展で展示した個人蔵のものと広島市立中央図書館蔵のものとは一部違っていたのです。その部分とは「石見屋町」と「堺町一・二丁目」です。「堺町」は幟旗の記載だけですが、「石見屋町」は行列の後半(右側)部分、特に砂持台(山車)の様子が変わっています。どうしてこんなことが!?その理由は瓦版の表題の下に書かれています。そこには、「(前略)なかなか詳しくは書けず、概要を記すといつても、板元の見聞に従って作成しているので、間違いがあったら許してほしい。追って細かく吟味して出版する。(後略)」とあります。どうやら記載内容の間違いを指摘され、版を変えたようです。ところでどっちが先に刷られたのか?というところ、堺町の記載から中央図書館蔵のものが先に刷られ、後で修正されたのが個人蔵のものであると考えられます。それにしても「石見屋町」の出し物の評判はどうだったのでしょうか?他の瓦版によると踊りも山車も見物人には理解しにくかったようです。それでこんな間違いが生まれたのかもしれないですね。

今回は「砂持」だけに、今までこぼれていた話をさらわせてもらいました。(山脇)



広島市立中央図書館蔵



個人蔵

広島本川川ざらへ町中砂持加勢図(石見屋町の部分)

おまけ

しろうや!広島城でもご紹介していた「砂持加勢まつり」は10月4日に無事開催されました。右の写真はその風景です。



～新旧ランドマーク対決？！

意外と絵になる天守閣

絵になる広島城天守閣の撮影スポットはたくさんあるのですが、堀をはさんで撮ろうとすると…
こんなところだったり↓



天守閣以外に周辺の建物がなにかしら写ってしまいます。なんだか広島城の周りには近代的な建物ばかりでがっかり…そう思われる方も多いのではないのでしょうか？ならば、あえてその環境を利用して写してみるというのはいかがでしょうか？

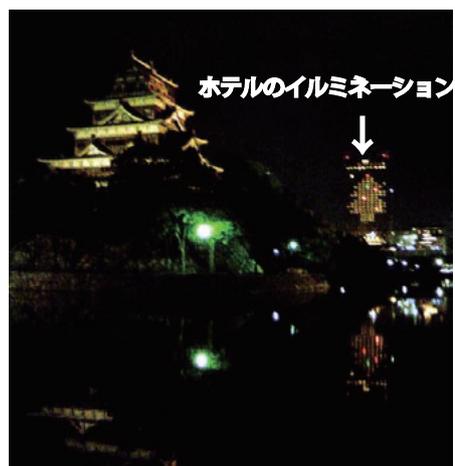
右の写真は、ある朝基町高校の校舎の窓に映った風景。もともと校舎内から見える天守閣は絵になるようにつくりだされているらしいのですが、天守閣側から見ると、近代的な建物の窓に、歴史を感じさせる広島城天守閣、そしてその右隣に現在ではすっかりランドマークとしておなじみの超高層ビル、リーガロイヤルホテルが並んで写るといふ、新旧入り混じったなんとも不思議な光景を見ることができます。

今でこそ、周辺の建物の高層化によってすっかり街に埋もれてしまった広島城天守閣ですが、昭和20年の原爆投下によって倒壊するまでは国宝に指定されていました。また、焦土と化した広島街の復興と都市化が進むまでは、はるか遠くまで見渡せた広島街のランドマークとして存在していたことを想像すると、この窓に映る二つの建物を通して、広島という街がたどってきた足取りの一端を感じることができるのかもしれない。

余談ですが…タイミングによっては、天守閣の右側にクリスマスツリーが登場！街に埋もれた広島城天守閣が夜景でも絵になるタイミングも案外あるのかもしれない。

広島街の歴史とともに今もひっそりと、でも堂々とたたずむ広島城天守閣は、昔と今が混在する不思議な空間でもあるのです。

(川橋)



しろうや！

広島城

編集・発行

財団法人広島市文化財団

広島城

〒730-0011

広島市中区基町21-1

電話：082-221-7512

FAX：082-221-7519

平成20年12月発行

広島城利用案内

開館時間：9：00～18：00

(12月～2月の平日は9：00～17：00)

入館の受付は閉館の30分前まで

入館料：大人360円(280円)

小人180円(100円)

()内は30名以上の団体料金

休館日：12月29日～1月2日

ホームページ <http://www.rijo-castle.jp>



携帯サイト